

書評

エリオット・ヴァレンスタイン 著, 功刀 浩 監訳, 中塚公子 訳
精神疾患は脳の病気か？
向精神薬の科学と虚構

稲田俊也

本書はミシガン大学の心理学者であるヴァレンスタイン教授により執筆された著書である。筆者は、まず第 1 章で本書の構成と概略について簡単に要約したあと、本論の最初となる第 2 章で、LSD の偶然の発見から、抗精神病薬のクロルプロマジンやハロペリドール、三環系抗うつ薬やモノアミン酸化酵素阻害薬のほか、リチウムや抗不安薬の発見など、向精神薬が発見された当時の状況について詳述している。続く第 3 章では、うつ病の生体アミン仮説や統合失調症のドーパミン仮説など、精神疾患に対するこれらの薬剤の効果から想定される作用機序についての生化学的仮説が、わかりやすく紹介されている。

第 4 章は、「証拠を精査する」と題して、まずは、これまで提唱されてきたうつ病における生体アミンの欠乏仮説や受容体感受性亢進仮説が納得のいくものではないにもかかわらず、製薬企業が選択的セロトニン再取り込み阻害薬の販売のためにこれらの仮説が宣伝に使われている現状を批判的に紹介している。また、統合失調症のドーパミン仮説についても、それが十分でない論拠をいくつか挙げたうえで、抗精神病薬が無効な統合失調症患者もかなりいることを取り上げて、統合失調症の異種性について言及している。さらに、気分障害におけるリチウムの作用メカニズムも十分に解明されていないことを取り上げ、精神疾患における生化学説に対して批判的に検証しており、これらの単純理論の展開に警鐘を打ち鳴らしている。続く第 5 章では、「証拠の解釈」と題して、デキサメサゾン抑制試験の例を挙げて精神障害の原因と結果が混同されている可能性や、有効な治療法から精神疾患の原因を推測する際の問題点について取り上げ、神経伝達物質や遺伝が精神疾患の生物学的要因のすべてではないことを論じてい

る。また、精神障害の診断の変遷に政治的な要因や流行のあることにも言及して、「DSM-IV」の問題点をいくつか指摘している。

第 6 章では、製薬業界がいかに向精神薬を宣伝し、化学説を推し進めたのかを、ソラジン、クロルプロマジン、プロザックなどを例に挙げて批判的に紹介しており、ここではさらに精神科領域のみならず、産科医向けのジェチルベストロールの宣伝広告についても詳述に取り上げている。また製薬業界が研究を支援する理由については、データの提示の仕方を操作したり、科学文献に影響力を発揮するいくつかの方法を提示して、批判的な見解を示している。第 7 章では、製薬業界以外で薬物療法や精神疾患の生化学説を促進させる特定の利益団体があることを述べている。この中で、米国心理学会が臨床心理士に処方箋を書く特権を認めさせるための法律制定を求めたのに対して、米国精神医学会が強く反対していることが紹介されている。最後の第 8 章では、向精神薬の生化学説が改めて支持できないことを述べて、製薬業界が推し進める生化学説に基づく販売戦略に批判的な論調を繰り返している。

向精神薬の生化学説の是非に焦点を当てた本書の論旨は、全体的に著者の見解や主張が一貫していて、わかりやすく述べられている書籍である。ただ、「精神疾患は脳の病気か？」と題されているので、できれば第 6 章や第 7 章の詳細よりも、近年、精力的に進められている精神疾患の画像診断や遺伝子解析に関する生物学的精神医学研究の最新知見についての紹介が、もう少しほしかったところである。

(財団法人神経研究所附属晴和病院)

●A5 384 頁 2008 定価 4,410 円(本体 4,200 円+税) みすず書房